

戦後型階級斗争の破産を乗り越え、全学斗運動の更なる総括を踏まえ  
自らの力をより根底的に鍛え上げよ

(我々は自分達の生きている現在と決して完全に同時代にいる事はない - ドブル)

はじめに

「70年代双刀斗争が - 見華やかな。そして余り固まれない耳新しい言葉の響きと、その乱舞のうちに、何時の間にかインフレを起してしまひ、現実にはその主要の内実を喪失してしまっている。そこで遂には「双刀斗争」の何れであるか未だ不明確なるに「双刀問題」云々を叫ぶるといった、全学斗内部での諸々様な混乱をも結果として、全日の学生戦線の最先頭に立ち、これを領導せんとする我々全学斗は、今こそ、及ぶ残念な混乱せぬ状況を再度、真剣に総括しなれし、「双刀問題」に関する我々自身の基本的な視点を文豪の前に充分に明らかにしdynamicなMを即ちに展開して行く必要に迫られている。そして我々には文豪に対するそれだけの責任があると思える。

以上の様な要請に基づき、以下、戦後型階級斗争の破産の根拠と、更には全学斗Mの成果(飽くまでその一部、一面の側面的評価に過ぎないが……)を踏まえつつ「双刀問題」への若干の予断-予を記みたい。

諸君の討議の叩き台、踏み台となれば、それで目的は充分に果たしたものと考えている。多大の批判を期待しつつ……。

2 戦後型階級斗争の破産

基本的

今更、言うまでもない事ではあるが、我々は資本社会の特徴が商品経済を媒介に、経済的搾取過程とその暴力的維持組織とが所謂、経済的「下部」創造と政治的「上部」創造=国家として分離するところにあることを何よりもはっきりと押さえておかなければならぬ。初期Marxの言う、所謂、政治的「国家」と市民社会への社会の分離である。そして、ある市民社会=経済社会に於いては経済的利害を要する諸階級、諸階級が自分達の特殊利害をめぐって相対し相斗争しているのである。しかし乍ら議会政治=体制が、ひとたが安定的に定着すると、普通には、この市民社会内部に於ける諸階級の政治=経済斗争は彼らの議会代表部を通じて、議会内政治斗争にBr的=一挙的に集約され総括される。及ぶものとして、議会はBr社会内部の諸階級、諸階級の種々な特殊利害の対立を体制内的に調整する為の政治取引所となるのであり、これとBr国家に於ける議会と合法議会政党の役割に他ならぬ。そして今日の日本帝国主義の様に労働者階級の基幹部隊の一部分が労働組合に組織され、労働組合が市民社会内部の最大の組織勢力として登場して来ると、この市民社会内部の政治=経済斗争の一切の主軸が、労働組合と資本家団体との間のなれ合い交渉によって占められる様になってしまひ、これに対応して議会も又、この組合労働者と資本家団体の間の経済斗争を体制内的に調整し、統合する政治取引所へと墮落するのである。

部分的にはせよ、資本主義の安定を積極的に支持した最大の反革命勢力は市民諸改良政変と合法Marx主義共産党、そして改良的、経済的労働組合指導部であったのだ!



またPrの階級組織の存在を否定するものではなく、むしろ、その存在を前提にし、彼らの  
組合主義的・議会主義的指大部を「破局と内乱」の声による同喝につ、その事を通じて  
Pr人民衆の抵抗を、この収奪攻撃に対して無力な条件斗争の限界内に押しこめ、それによつて  
危殆を乗り切らうとするBrの過渡的政治体制に他ならない。

そして現在の日本に於ける階級情勢は1920~30年代に於けるドイツに於けるワイマル  
体制にも似た半敗北したPrと半勝利したBrとの間の過渡的均衡体制・過渡  
的妥協体制以外の何ものでもない。しかし「一つの時代の終焉、それは階級間の相  
対的均衡の時代の終りである。そして新しい時代(原文では「他の時代」)の始まり、それ  
は、争いによる解決と力力の分配を排する全面階級戦争の時代の始まりなのだ」と  
いうドブレのこの言葉は我々に示さるべき斗争の方向を指し示すものとして含蓄あるも  
のではないだろうか。従つてこの様な意味に於いては、60年代に於ける様々な階  
級斗争は、また戦後型階級斗争として階級斗争の新しい段階にまで過ぎず、「革命的  
反革命的、生る死るの最終的決着を要求する地平」が今我々の前に目に視えて、広が  
つていると考えなくてはならない。

そして、以上の事を諸君は、口より把握・認識してあるねばならない。即ちPr人民衆  
の不满と憤激、そこから生ずる現状打破への革命的energyを最早、通常のBr部隊  
権力(職業学校団を基軸にして上から下への反軍事的命令体制で固められた通常のBr部隊  
治安公安警察 行動隊 ... ETC)の手に負えなくなった規模と高さまで横への広がり、を  
持つたまで達した時(寧ろ、そこまで人民の革命的昂揚が高まりきれない段階に於いてこゝ  
には色々あるけれども)このPr人民衆の斗争を、彼らの組合主義的・議会主義的指  
大部を体制内の条件斗争にあり及べ、暴動する事か不可能となり、Pr人民衆に対する彼ら  
の影響力と統制力を麻痺し、無力化している時、即ち、今やBr支配階級にとっては、Pr革命  
を阻止し、資本主義体制を存続する唯一の方法は、このPr人民衆の現状不満と現状打開の  
革命的energyの爆発を抑圧・弾圧するのではなく、むしろそれを豊かた方向に集約して  
爆発させ、Pr革命もしくはPrの斗争の仮装をまとつたBr反革命を演出するものであるとい  
う事を、(Nazis - 民族社会主義労働者党はまさにその典型的典型であるし、数度に  
わたるBr世界大戦もまたその歴史的教訓である。そして現在、日本に於いて広範に繰  
り広げられている様々な市民M・住民M - 公害斗争、recall M、施設 ... ETC に関して  
も以上の様な点を我々には、より把握・認識しておく必要がある。一勿論、公害斗争等  
我々のinitiativeの下に展開してゆく事は絶対に欠かさない重要な任務である - Br  
は交替にたけている、日本帝国主義には百有餘年の歴史の重みがあるのである。我々のMは  
まだその端緒にのつたばかりではある ...) )

### 3. 全変斗争Mの総括

諸君、60年代後半から70年代安保斗争に至る全変斗争Mの画時代的かつ歴史的意義  
がまさに「占拠」という斗争形態を生み出し、従来の学生Mの組織形態を一変させた。  
所謂、全変連Mの限界性を、より刻印した事に他ならなかった事を再度総括しよ  
うではないか。何故なら「占拠」斗争は資本主義体制の限界を越える斗争形態だから  
ある。Marxの「資本論」がその全体系をもつて明らかにしている様に、全資本主義体制の

基礎は社会の物質的基礎である生産過程と資本家自身の生産過程 - 「資本の生産過程」  
 として組織し編成し統制している点に在る。生産過程が資本の生産過程になっている  
 らば社会の全生産物は資本の生産物と化するであり、従ってそれを現実には作り出した労働者  
 階級は自分の労働力を絶えず資本家階級に売り渡し、それによって得られた賃金が自分自  
 身の労働の生産物の一部 - 幸うじて彼の労働力を再生産するに足る一部 - を買  
 い戻さなければならぬのである。( \* Lenin は労働力商品所有者意識、というBr思想  
 に立脚した政治主張を組合主義政治として扱え、又々Br Ideology と不断に徹  
 底的に斗った。この一文も決して資本と労働との関係を価値関係 = 商品交換関係とし  
 て扱っているものではなく、あくまでも階級支配前提にした資本家階級総体と労働者階  
 級総体の関係として問題にしているのである。従って2 Inter カワッキー 変革はもろろの事  
 業共同 = 黒田ism 宇野ism とまた全く無縁であることとはっきり断つべく。 ) 又資本  
 家階級の「法と秩序」及びそれを維持する為の全組織暴力装置体系は、つまりこの生  
 産過程の「資本の生産過程」としての確保を、従って「場」その他の生産手段やその又補  
 手段となる学園に対する資本と国家権力の非他的な一元支配と統制を維持する  
 為の材料に他ならない。従って「占拠」という斗争形態はたとえどんなに控  
 制された要求の下に斗われようと、支配階級・国家権力にとっては全Br体制の根底に対する反乱  
 と反逆の行為を意味せざるを得ず、彼らの全組織暴力との対決へと追いつまされるを  
 得ないのであり、こうして必然的に武装占拠斗争へと発展せざるを得ない。

なる点をはっきり踏まえておこなうならば、自治会決議による学園合法ストライキ (→ 半  
 or 非合法的学園占拠) ・ 又家集會 ・ 又家武装カンパニアデモ (→ 5・19 祖園石段下  
 武装占拠斗争) と我々の斗いは67自校から68自初頭になつた羽田・佐世保・玉  
 成田三里塚斗争 もしくは、それ以前の斗争形態へと一見したところ年戻り、もしくは停  
 帯している様に見えるけれども、畢竟は決してそうではないのである。(勿論斗争の形態  
 変遷問題にしても今更、始まらないが……)。 以上の事をみて来ればこれらの斗争  
 形態、もしくは戦術と一般的に否定して去る事の反罪性も又明らかではないだろうか。

しるじら、我々は一歩に於いて中央集権化された近代資本家階級の武装力  
 に対しては、街頭デモンストラーションは、たとえそれが初歩的武装デモに発展よ  
 うと、政府支配階級の政策に対する実力抗下の意志表示以上に出るものではないこと、  
 こうした実力抗下の意志表示斗争は 社共・総評同盟・JC = Br 戦線・別働隊一組  
 合主義・全済主義・合法共闘会主義・一國主義・民権共闘・排外主義 = 凡ゆる日和見主義一か  
 従来の様にとりつら700年安保の如く反安保の又家カンパニア斗争 - 又威集會・又  
 威集會・焼香デモ・請願デモ - を組織し、それを対国家権力斗争や内閣打倒・政教交  
 替斗争に集約するのとは、互ら突き前に麻痺させ、阻止させる手段としてのみ主要に有  
 効であったし現在も又そうであるだろう。(勿論、何物をも恐れぬ勇気とたじか  
 事のない又胆を兼ね備えた優秀な戦士を育成する生きた学校・教練場でもある側  
 面を見落してはならない事も確認しておかなければならない。)

竹ざめや鉄パイプでは即、国家権力を打倒する事は出来ない。街頭武装斗争の  
 現存的意味をはずつて総括しておかなければ、それこそ単に我々の我々に対する  
 左翼本見病、誹謗と中傷を甘受せねばならなくなってしまうだろう。

中核を筆頭とする。 60年代旧「新左翼」諸党派は権力問題に對

する明確な視座が欠落している故に、異なる街頭実力デモの規模と闘争性を単に量的にエスカレートする事のみを競、唯一、それを自らの党派性として自己目的に固定化したのであり(その革命的・カンパニイ的限界を露呈し玉研ジョーへと転落していったのだが……) それによって自分達の社契と単に直接行動に於いてのみ乗り越えたに過ぎぬ「べた」の急速実力派・実力及安保党、政策反対党でしななかつた事を証明したのである。

我々こそは、異なる市民街頭主要諸派を明確に乗り越え、街頭実力闘争をより高次の質を持った革命闘争へと自らを止揚し、それへの媒介となつてゆく必要はなうまいに又、それなくしては異なる革命的・カンパニイ的・五カ斗争的限界を超越し得ないのだから我々は常に「基本的な革命slogan」を掲げ、その下に人民大衆を領導し抜き、Prを革命闘争の頂端へと引くヨリ込を事によって「戦争をなくす正義の戦争」を今より着々と準備してゆく事によって1917年ロシア革命の世界革命への挫折以降、組合的・議会的政治取引によるPr階級斗争の体制内化を根柢的特徴とする現代過渡期世界ともし通リ主体的な階級斗争の「史」として必死に切り開いて行かねばならない。

以上の様な諸点を総括し、本稿として踏まえて、以下一面的ではあるが全変斗Mの再度のストムを二〜三点について簡単に整理してあつたいと考える。

(1) 我々は自らの斗争を貫徹しようとするは、単に支配者階級・国家権力に対してのみならず学園内部のBr秩序派一教授会・日共・民青・石翼 に対しても自己武装しざるを得なかつた。学園占拠斗争の中なら、大衆斗争組織として生成して来た全変斗は多かれ少かれ自らを武装せざるを得なかつたのである。更に全変斗は自治会Mと異なり私的個人の一ノ一票を基礎にする事は出来なかつた。それは、大衆の中の先進的活動家部分の直接行動から始まり、この直接行動によって残りの大衆をもMの中に巻き込み、全般的直接行動を組織する手法、先進的活動家による所謂拠点占拠斗争によって直接行動主体的に全学占拠を組織するものであつた。占拠斗争は(たとえそれが一学園であるにせよ)資本の秩序を破るものであり、それは最早体制内の圧力斗争行為ではなく明らかに反乱行為であり、そして反乱は私的個人の一ノ一票投票というBr的組織原理に基づいて組織され得るものではなく、まず最初に反乱を決意した先進的活動家の部分的反乱から始り、この部分反乱自身によって全体的反乱へと組織される他はなかつた。

(2) 全変斗Mは全2の大衆的反乱Mと同様、行動し、斗争し、反乱する大衆の革命的独裁のMとならざるを得なかつた。我々の従来のMは行動する大衆自身が自ら決断し、執行する直接民主主義のMであつたが故に同時に行動しない、或いは反対行動敵対行動する部分に対する我々の革命的独裁であつた。そして、こうした革命的独裁の論理は当然にも我々内部にも反映されざるを得ない。M参加活動家・大衆自身の一ノ一票の民主主義に依拠するとは出来なかつたし、又そうした一ノ一票投票に基づく固定的な執行部を持つ事も出来なかつた。(全学斗と学友会組織の円ゆる分界に於ける区別連関・分離・統合の有様性)。  
全変斗の生き、なしたdynamicなMの推進と意志決定は、その中核前衛となつ

て活動する中心的活動家団体や行動団体そして最も軌身的活動家の絶えず交替する直接行動のinitiativeに依拠する他なつたのである。

(ハ) 全共斗組織は必然的に臨時的組織であり自治会組織の様な日常的な持続性・恒常性・法的な定型性をハッキリ持つ得るものではない。全共斗型組織は学園占拠・反乱斗争の中から生れ出た臨時大衆斗争委員会、大衆反乱組織である。従つて全共斗の反乱組織同様、唯一、大衆反乱の中でのみ、その生命を維持し得る過がないからであり、又全共斗の反乱はそれら「部分的反乱」となる限り、便宜するならば直接に「全社会的反乱」へと発展しない限り、必然的に「一時的」である。所謂、全共斗型組織は、それら「恒常的」な組織として定着する為には、部分的反乱の繰返しを通じて「全社会的反乱」—「一場反乱占拠」を含む「全社会的反乱」の一部へと自らを止揚し、そうした「全社会的反乱」—「革命」の一部として自己を定着させる以外にはない。

68年5月の仏や69年11月の伊では学園占拠斗争がPr人民大衆の工場占拠にネットの契機となりそこにこそ生変過程を基礎とする労働者階級の反乱の武装自己能力・Sovietを生み出しBr支配階級の国家権力と、この労働者階級の武装自己能力との所謂、「二重能力状態」が出現したのである。とりわけ仏に於いては3/22パリ工学校ナンテル分校の活動家反乱斗争に端を発し5/3—1/0に至る学生を中心とした種々色々の「マルティン・ブタン」の工場占拠戦と「リカード」戦として5/13全日ネットを契機に10000人（展開）の労働者による工場占拠反乱として大爆発したのである。その大衆的背景としてはもちろん「日米通商体制」の動搖による仏の「日米赤字累積」の慢性化に伴う国内総不況への国民的不満の蓄積が考えられる。畢竟3/18にはマンハッタン銀行、アメリカ銀行が爆破されたのである。—20日にはアメリカンエクスプレス社破壊事件が発生した。

総じて、全共斗型運動反乱斗争は積極的部分の消極的部分からの、先進的部分の後進的部分からの、断固たる部分の日和見的な部分からの「分離と解放」なしにはあり得ない。何故なら反乱斗争は再度言う様に私的個人の一衆投票によるBr的多数決や先進的部分と後進的部分の「統一と団結」なしには始まり得るものではない。反乱はまず最初に決意した先進的部分が投票箱によってではなく、自らの断固たる反乱の直接行動によって、大衆に反乱をつづつて、それによって大衆と対決し、大衆と反乱行動に連帯する部分と、それに反対行動する部分と、中間的動搖部分とに分裂させ、反乱に敵対する部分との非協同的・非和解的な斗争を通じて、こうした大衆の分解と分裂を徹底的に促進させる方法—「分離と対決」の方法による以外には全共斗運動は組織し得なかつたことと維持し得なかつたのである。あつての全日的昂揚を生み出す事も出来なかつたであろう。そこで、こうした反乱への大衆の直接行動の運動—「大衆斗争委員会、行動委員会」—の端と切り拓いたところから全共斗運動の画期的直時代的の意図があつたといえるのではないだろうか……。所謂60年代旧「新左翼」が、行動前夜としての役割を果たして来たのは67年末から68年初頭に及ぼす羽田・佐世保・三子・成田斗争の段階までであつて—たゞ全共斗による大衆的学園占拠斗争が登場するや否や、かえつてその障害物にと彼らは転落していったのである。

以上、やゝ一面的な言い方はあるが、簡単に全共斗運動の総括に就いてきた。最後に、我々の今後の斗争の方向性と能力問題に関する若干の考察を記してみたいと考える。

### 4 我々の斗いの方向性と権力問題に関して

しかし、しかし乍ら諸君！一切は敗北したのである。仏に於ては仏共産党B.C.P. (General Confederation of Labor) は外取捨の為の国家権力との条件交渉に依る事によって各戦線と分断孤立化させ、一切を組合的・社会的要求斗争(取引)へとすりかえる事によって決起したPr人民大眾を敗北の極へと追いやったのである。

一体この事は何を意味するのか。何を我々に教訓として与えてくれたのか……。それは明らかで次の事であるだろう。即ち「Pr人民は自相身の階級の山にPrを仮装して存在するB.P.秩序派・組合的・社会的・政治的主的自派を徹底的に無力化しこれを解体し尽す事なくしては、一切敵・支配者階級・国家権力に勝利できない」という事。まさにこれこそがドイツ革命の敗北以降、仏・伊革命敗北に至る今日、我々の生きた教訓として我々に残されたものに他ならない。

一歩を進めよう。

なる。即ち従来の先進国革命斗争に於ける「工場占拠 → 革命的に軍力状況の創出(最も徹底したB.P.民主主義) → 武装一斉蜂起 → 権力奪取」というSoviet型革命(今の今迄、そしてまた「八派(日共)も又そうであるけれども、これこそが近代Prを主軸とするMarxの言意味での政治斗争 → 政治権力の為の斗争、革命的権力斗争と見做されていたものである)は当然にも一日主の「史的限界を刻印されたものとして、そこで「革命とは軍事をめぐる問題である」という革命の基本的奇題すら忘れ去り、ムたすらに大衆Mへと召喚していった合法Marx派の衰微な末路として敵権力B.P.の攻勢の前にあえなくもしるさながら当然にも敗北していったのである。

僕等は今こそ全斗型組織に乗った所謂反乱型革命M(自然成長的発生革命史観)の検討に真剣に着手せねばならない。Soviet型蜂起が先進諸国に於いて何に故に勝利をおさめ得たのか！最も真正な革命戦Iはまさにこの点からこそ新たな勝利への道を探索・体得すべきである。

たゞし、その際に次の点に関しては若干の考慮を払われねばならないと考える。

それは今更の様に言うまでもなく「工場占拠」の革命的意義についてである。大衆的工場占拠斗争はたとえ「この事はよくあるが」それをPr大衆自身が部分的・改良的な要求実現の為の圧力手段「賃上げ」or「労働条件改善」or「労働軽減」の為の斗争手段」と観念していても、さうして乍らPr共産主義実現のための革命的斗争 - B.P.国家権力に対するPr階級の武装斗争・権力斗争 - の原点となり得る点に於いての原則的評価を決して見落してはならない。何故なら工場占拠斗争にムとたム入るや否やPr大衆はB.P.市民社会の一切の「法と秩序」の組織暴力を真正面から敵にまわつかるを得ないからであり、従って占拠を貫徹しようとすれば、このB.P.社会の組織暴力(自警団・右翼・ガードマン・ETC全を含まない)に対して自らの斗争を武装自任せざるを得ないからであり、(もっとも、先にも述べた様に仏五月革命に於いてはなる段階に到達する以前に仏共産党・CGT.の指合によって労働者は自ら工場占拠、B.P.バリエードを解任してしまつたのであるが) - 従ってそれはPr人民大衆の即目ではあるにせよ直接的な大衆武装 - 自己武装 - の一つの原典となる可能性を本心で持っているからである。

僕等は今、世界的な革命Mの新たな昂揚を身をもって至望しつつあるし、敗北に終つた





70年代権力闘争とは戦後体制としての米帝の世界的生体力に屈従したソ連Stalinismの平和共  
 存体制の崩壊とこの物質的諸前提と目的意識的に空ぶる事によって、この戦後共存体制の特  
 徴的表現であった社会制民主的の手續を何らする事なく人民の権力とPr独裁-臨時革命政  
 府(革命評議会を含む)として樹立する迄の過渡期の斗争の事には他ならず、それは革命戦争過程  
 に於いてPrを一旦的階級にとどめさせる事なく世界的階級(世界的二重権力から世界社会抜  
 への成長)へと止揚してゆく事いと相即的である。

従来、Pr日既何れを反帝斗争の目的的一戦線であるかの如く歪曲して考えられて  
 来たけれども(この事自身既に日既共主義Mに於けるソ連Stalinismの過渡期階級斗  
 争の敗北に由来するものに他ならない)、この悪この限界は日既帝日主打仆が世界的  
 有形的結合もない事、一旦主に陥り、とりわけ過渡期階級斗争-労働者国家との  
 結合をめぐって革命内戦内部での混乱から「反スウ主」の限界性として露呈されている。

先進国心臓部での我々Prの任務、とりわけ日既主義的任務は、経済的後進国被抑圧民族と  
 先進国内被抑圧人民の運動とハッキリと結合し、それを媒介し、Vietnam 北境の如  
 きIndo-China 全域に於ける民族解放社会主義革命戦争が世界帝日主打仆に向けた過渡的な  
 共主義的先行形態(共主義者の任務)である事を確かめ、労働者国家の過渡期階級斗  
 争と世界的な有形的関係に如何に、現実に止揚していくの事という事、一点に存してい、  
 我々全ての闘う同志がここにしっかりと確認し、次のドラムの言葉に心を一つに固く團結  
 しようではないか!

「或る一定の不安的状况に於いては革命について普通の語りがあるかもしれない。しかし  
 (本当に、真実に)革命を行おうと決意した全ての人間の間には必然的に一つの一致が  
 存在する」 - ドラム

5 最後に …………… 巨人が隊列を創出せよ

諸君! 激動の階級斗争の渦中に在りて、僕達は、僕達自身のもの幾多の欠点、弱点を決して  
 「不安の質」にゆたかぬる事は許されない。もしも、不安に甘える様な事があったら  
 は僕達は血で血を洗う熾烈な階級斗争のその未来に於いて、必ずや不安からの敵に  
 い復しやうを受ける事になるであろう。それらは、早急に克服されねばならない。  
 既に日既Prは9月に予定した成田=三里塚に次強制収用を断固やり返す決意をもつ  
 今着々と体制を整いつあるし、更に次期国会での「沖繩返還決定詔印批准」から72年  
 4月沖繩返還実現を強行しようとしている。(自衛隊の沖繩派兵への準備も、もう  
 既に完了しつつある)。僕達は4・5・6月斗争の真剣な総括を踏まえて、今秋、  
 権力斗争勝利に向けた強固な部隊の形成を勝ちとるべく、緊集した討論を本会館に於  
 いて断固打ちとろうではないか!

確かに百の言葉よりも一つの実践である事に基本的に誤利はない。このように如何  
 によく「脱共武装」をいさよとも一つの運動を起す前にはまず「頭」に相談をな  
 ればならない事も又明白な真理である。討論に討論を重ねることは次の実践的衝動も  
 生れてくるため。諸君一人一人が優秀な organizer となって、  
 我々諸君の同陣に結集させてゆくと同時に自らも又最も優秀な革命戦士へと心身ともに  
 磨き上げていく事によって、9月には数百、数千の未入の隊列がここに同志の

又には地響を起して雄々しく登場せん事を！ 此で敵Br-国家権力(…政治・公安警察・特動隊)をこぼし心底震撼せしめん事を！

Prは至るところで強く敵Brは至るところで弱くなっている。Pr人民は必ず勝利する！ 諸君！ Dare to act！

7/7 入管法案国会再上呈阻止斗争に全この同志は決起せよ！  
— 学友会中央常任委員会書記局 —

Memo

[注意]

- ・レシヨは各自責任をもって保管して置くこと！
- ・一定の期間を至れば必ず処分して置くこと！